

# 異邦人の役割

永田円了

*In the world but Not Of the world*

「今日、ママンが死んだ」で始まる小説「異邦人」(1942年)、人間社会の不条理を描いた仏小説家、アルベール・カミュの代表作である。ママン(母親)が死んでも無感動な主人公ムルソー、母を埋葬した翌日、女性と砂浜で遊び、アラビア人に発砲して殺害してしまう。やがて法廷に立たされ、裁判長から発砲の動機を問われると、「それは太陽のせいだ」と答える。

不条理も人間の存在の必要な部分だとするなら、世間の常識から外れたこの部分(異邦人)にも光をあててみることも必要なこと。いや、もしかしてこの部分こそ人間探求の重要なものかもしれない。



## 自分の中の異邦人

「兄が死んだ。姉から電話でそのことを知らされた時、私は思わず小さな声で万歳と叫んだ」。なかにし礼著「兄弟」(文藝春秋1998年)の書き出しだ。カミュ「異邦人」の書き出しそっくりのこの作品も、人間の奥底に潜む不条理の部分を炙り出している。



2003年4月、青森市立古川小学校で行われた、なかにし礼の「課外授業」、6年生全員が“もう一人の自分”を見つける課題を与えられる。生徒にとまどいが見える。それまでは、常識の中でいい子でいることがあたりまえだった子供たち、なかにし氏の作文指導で、もう一人の自分、自分の中の異邦人を見つける作業に入る。ただいい子でいたい、という殻を壊すには泪と痛みがともなう。でも彼らは自らの心の奥底を覗くことに臆病ではなかった。

「コトバというものは、相手を負かすとか、世の中をうまく生きて行くためにあるのではない。コトバというものは、自分自身と向き合って、自分自身をどうやって表現するか、というためにある。コトバと関わり合い、コトバと格闘することで、人間は自分の中にある魂を活動させることができる」と、なかにし礼氏は結んだ。



なかにし氏をずっと悩ませていた兄の存在、兄に対する恨み辛みを、正直、正直に原稿用紙600枚の小説に書き終えたとき、兄に対する恨み、辛み、憎しみは全部きれいに消え去ったという。自分の中の闇の部分(異邦人)を無視しない。むしろその部分に注目し、光を当てることによって、許しという意識変化が生まれたのであった。

## 能の世界も異邦人



なぜ能は、これほどまでに日本文化に根付いているのだろうか。いったい能の何が多くの人々を魅了するのか。「死者というのは、ある1つの人生を終えて全てを見通すことができるような立場で物事を観ることができる。この死者の目を現実の中にもってくる、そういう作業を能の作者たちはしたのです」(多田富雄)

死から生を観る。死者という異邦人が語る言葉に、現実では味わえない深淵なる心の叫びを聞く。能の世界はこの俗なる現実の真っ直中に、聖なる空間を発見する喜びを与えてくれるものなのである。

### <事例 DVD等>

久保田早紀「異邦人」1979年、140万枚売れる  
39年後のいま、久米小百合、本名で音楽宣教師  
アルベール・カミュ「異邦人」1942年/不条理な世界を描く  
なかにし礼/課外授業/自分の中の異邦人と向き合う  
固まる鼓童、玉三郎(異邦人)に演出を頼む  
横峯さくら(28歳)/ギャラリーは敵じゃない  
経営者・秋山咲恵、行き詰まる/富士山を見に行く  
白隠禅師作「富士大名行列図」/二人が富士山をみる  
映画「利休」1989年/利休は秀吉にとっては異邦人  
能の世界/死者の目で現実をみる/白洲正子、多田富雄  
歌・イーグルス・ドン・ヘンリー「デスペラード」Desperado

円了のホームページ: [www.enryo.jp](http://www.enryo.jp)

